学校だより

調布市立調和小学校
校　長　横山　公一
令和５年２月２８日

HP: http://www.chofu-schools.jp/chowa-sho　　Mail: chowa-sho@chofu-schools.jp

たわわに咲く　花のように

校長　　横山　公一

◇毎日凍える寒さが続きます。しかし、それをものともせず、学校近所の梅はつぼみがふくらみ、紅梅、白梅とも冷気を貫いて届くお日様の光を蓄えて、実に美しく花開いています。

いよいよ、年度最後の月に入りました。学校では学習、生活、諸活動の年間の総まとめとふりかえりが行われるとともに、文化の引継ぎが高学年を中心に急速に進む時期でもあります。本校ではこの「ふりかえり」を日々の活動に取り入れた学習や活動を進めてきました。各時間の終末に学習内容や自分の目標の達成具合等の視点で短文にしたり、発表し合ったりを積み重ねてきました。いずれも次の活動につなげるという強い意図があります。各教室を回ると、一人ひとりが毎時間の課題に正対し誠実に学ぶ姿や、互いに協働し意欲的に学び合う姿があり、学び方の定着とともに学年相応の成長が見られます。

一方、引継ぎは、感染症予防のため、たてわり班活動をはじめ異学年集団を基盤にした活動がずいぶん制限されたものの、可能な範囲で地道に進められています。又、休み時間等に響く６年生の和太鼓は勇壮で、リズムのひたむきな連続がこの季節の到来を全てに対して伝えているようです。

子供たちが困難にもくじけず学び、朗らかに活動し続けてきたことが、ひとつまた一つと花開き始めてこの時になり、やがて連なって咲くあの梅の花々のように、生き生きしていて喜ばしいものです。

【私にとっての戦争体験】

◆悲しいことに海外での戦争はいまだに続き、私たちの生活に間接的にではあるものの影響を与え始めているこの人間の仕業に大きな不安を感じる毎日です。大人は、子供たちに何を教えればよいのでしょうか。

戦時中、私の両親は小学生でした。私は空襲や田舎への疎開の話をはじめ、四年前に鬼籍に入った父からはもちろん、今まだ存命の母親からも様々な体験を聞かされて育ちました。

母の家族は当時埼玉県の北浦和に、祖父母と同居していたそうです。今では建物や家屋が広がる郊外の街も当時はまだ田畑が広がるのどかな場所だったとか。終戦間際だったからでしょう、首都やその近辺を狙う軍機が幾度も幾度もやってきてははるか頭上を通り過ぎていくような日々に、不気味な錘のようなものを心の底に抱いていたと、母は今そのように表現します。町に空襲警報が鳴り響けばたとえ学校にいたとしても家に戻され、すぐさま庭に掘ってあった防空壕に駆け込み息をひそめなければなりません。ある日、子供だった母が在宅中にまたしても空襲警報が鳴ったのですが、壕への行き来に嫌気がさしたか、はたまた年老いて体が動かなかったかは知りませんが、祖母が「もう私はここにいる。」と言って頑として譲らず、床の間で布団に入って寝てしまったと言います。警報に恐れをなした家人がみな防空壕に退避したのをしり目に、どういった気持ちがそうさせたのか、私の母も「おばあちゃんと一緒にいる。」と言ったまま床にもぐりその時を待っていたとか。やがて爆音が、サイレンの悲鳴だけある静けさを遠くからかき消すようにせり寄ってきて、同時にどかんどかんという地響きが近づいてきたそうな。そして唐突に、家屋や地域全体を巨大地震が包むがごとくの大音響がすべてを揺るがしたのだとか。生き残った次の瞬間に恐怖がやってきたと回想する母。近くの畑地に爆弾が落ちて爆裂したのだとはのちに分かったこと。さすがの祖母もその有様に降参し、母を連れて壕に逃げこんだそうな。

「私を見捨てて、先に壕に逃げこんだ家族のみんなを、今でも恨んでいる。」と、冗談めかして笑う私の母のその家族も一人亡くなり二人減りと、時間は、春を告げる花開く今もゆっくりと先に向けて流れ続けています。

両親の話の結論は常に「戦争は絶対にしてはいけない」というものでした。あの時代を生きた者が抱いた恐怖と不安と生活の現実を、「これからの世代に味わわせたくない。」の繰り返しです。

３月は殊に、東京では平和について考える月でもあります。お時間があればご家庭でも話題にされてみてください。